

発表要旨

Using Speed Reading as a Warm-up Activity for Literature Classes

英語圏文学の授業で速読活動に関する考察と提案

チャン・テッカ

多くの日本人英語学習者は大学入試向けの英語教育を受け、沢山難しい単語を知っているも使いこなせていない。そのため、大学に入った後、英語圏文学の本を読むのにも一つ一つ単語を翻訳し、読むスピードが遅いため、うまく作家の伝えたい言葉など意味がとりにくい。私としては英語で Graded Readers の多読を実施して欲しいが大学の教育課程には入れるスペースはあまりない。一つの対策として取ったのは Victoria University of Wellington で作られた速読コース (Speed Reading Course) である。これは、Z 会などが出版されている大学入試向けの「速読英単語」シリーズのようなものではなく、学習者が 95%-97% の単語を理解できている難易度のコースを通して英語のフルーエンシーの向上を図り、英文を読む所要時間を 50% まで下げるものである。

本プレゼンテーションでは高校と大学で実施した Speed Reading の取り組み、およびニーズ分析を紹介し、生徒の英語に対してのモチベーションの変化、及びニーズ分析の結果を踏まえて作成した日本人学習者向けの Speed Reading コースを紹介したいと思う。最後にどう、「英米文学史」などの授業で利用できるかを考察する。

シンポジウム要旨

近現代フランス文学・思想における「家族」と「性差」の表象

現在、性の多様性がグローバルな関心事となっているが、フランスでは、1999 年の PACS 法案成立や、2013 年の同性婚成立以降、性差の問題が特に家族の問題と緊密な関係を結ぶようになっている。家族における性差の問題、あるいは、家族と性差の問題はどのような射程を持ちうるだろうか。「ジェンダー」という言葉が一般的に用いられる以前から、欧米圏の思想・文化は、性と家の問題を思考してきた。本シンポジウムでは、三人の発表者が近現代フランスの文学・思想テキストを取り上げつつ、古くて新しいこの問いの持つ重要性について検討する。(齋藤山人)

クララン共同体における家政の表象と性差のキアスム

発題者 1 齋藤山人

本発表では、ジャン＝ジャック・ルソー『新エロイズ』に描かれるクララン共同体のメカニズムを分析しながら、家政と性差との関係、さらには作者と登場人物における性別の交差について取り上げる。よく知られているように、ルソーの書簡体小説は、18 世紀フランスにおける最大のベストセラーと言われており、そこでは、ヒロインであるジュリ (とその夫ヴォルマール) によって管理されるクララン共同体が描かれる。この家族的な小社会は一見すると、パリの社交界と対照を成す、純朴な習俗と牧歌的生活を体現しているように見える。しかし、その生活様式は決して単調で退屈なものではなく、日常の倦怠に対する鋭敏で近代的な意識によっても支えられていると考えられる。家政の中に、絶え間ない変化と差異

のメカニズムを持ち込むジュリの感性には、ルソー自身の--自伝的著作に表現されるような--感性が映り込んでいるのではないだろうか。『新エロイーズ』だけでなく、その他の著作にも見られる「倦怠 ennui」や「移り気 inconstance」のテーマを考察しながら、作者の性と登場人物の性が生み出す交差の様相を明らかにする。

ドゥルーズ=ガタリにおける家族主義批判

発題者 2 黒木 秀房

グローバリズム、情報化の加速によって急速に変化する現代社会に対応するため、多様性と包摂が声高に叫ばれるようになって久しいが、その一方で分断と孤立が進んでいることもしばしば指摘される。その中でも喫緊の課題として見直しを迫られているものの一つが、伝統的な家族観とそれと結びついた婚姻制度であろう。これらに対してフェミニズム、クィア、ディスアビリティの側から異議申し立てが行われ、さまざまな理論が提唱されている。こうした脱構築の理論と実践の支柱となりつづけているのが 68 年の思想であるが、昨今ではウォーキズムの元凶として批判される一方、より過激な方向に舵をきるリベラルの発想源にもなっている。本発表では、これらの重要な参照項となっているフランスのポスト構造主義の哲学者たちのなかでも、とりわけドゥルーズ=ガタリに注目しつつ、家族と関連のある議論の核心にあるいくつかの概念について検討したい。

今日のフランス文学にみる家族史の現在

発題者 3 篠原 学

今日のフランス文学における家族について報告を行う。フランスの権威ある文学賞のひとつ、ゴンクール賞には、近年、家族をテーマとする小説が相次いでノミネートされている。その傾向を概観したうえで、ここ二年間のゴンクール賞、および昨年度から始まった「日本の学生が選ぶゴンクール賞」の候補作のなかから二作品を取り上げ、詳しく紹介する。ソルジュ・シャランドンの『ろくでなしの子ども』(2021年)とクロエ・コルマンの『姉妹のように』(2022年)は、いずれもナチス・ドイツ占領下のフランスでユダヤ人の子どもたちの大量検挙にかかわった家族の歴史を描いているが、語り手の性別は前者が男性、後者が女性と異なっている。また、前者の物語は父と息子の垂直的な関係性が軸となるのに対して、後者の物語は姉妹の水平的な関係性が軸となる。こうした語りの性差に着目して、文学上のテーマとしての家族のアクチュアリティに迫る。